

桑名別院を支える人々②

桑名別院婦人会長

長島組寶林寺門徒

伊藤たね子さん(七十二歳)

うれしかったもんで

現在、桑名別院の婦人会長をしておられる伊藤さんはお寺という場をこう語られた。子どもの頃、農作業が忙しい父母に代わって祖父母と過ごす時間が長かった。朝は「正信偈」のお勤め、報恩講には晴着姿でお寺参り、村内の和讃講の手伝いなど、真宗



門徒の生活の中で成長した。そして、嫁ぎ先の祖母が大谷婦人会の長島地区のまとめ役をしていたことから、その活動を手伝うようになり、義母、私へと引き継いできた。さらに、友人に誘われて聴講した暁天講座での米沢英雄先生のお話に感銘したことが、別院への思いを強くした。

別院の手伝いを始めた一九八七(昭和六十二年)、桑名市福島の後藤すすきさんと出遇った。当時、庫裡の仕事を手伝う人が少なく、働きのすすきさんが何でも一人でこなしていた。また、すすきさんは「お経に遇わせてもらう」と、少しの間でも本堂へ馳せ参じていた。すすきさんと出遇えたから、今の私がいると感じている。

蓮如上人五百回御遠忌の時に婦人会の組織作りを始めた。婦人会だよりを作って活動を宣伝したら、二百名ほどの会員が集まった。その際、本堂のサッシを寄付しようということになり懇志を募った。この活動が婦人会の基盤固めとなり現在の定期活動の始まりとなった。

「楽しいことをやろうね」と協力し、知恵を出し合って活動していることが婦人会のパワーの源。お斎の準備しかり、清掃活動しかり。すばらしい能力を発揮される先輩や若い世代の方が多数みえるので、互いに尊敬し見習うことができる。こんな有り難い場所はない

かなか無いし、出遇いに感謝している。世代を超えて本音で話し合い交流できる場が無くなってきている現代。その場を「お寺」は継承している。だから、一人でも二人でも多くの人が年に一度きりでもいいから「お寺」を体験して、見聞したことを周りの人に伝えてくれるといいなと思っている。

お寺であればこそその出遇いがあり、同じ気持ちで話せることが「うれしかったもんで」。だから、気持ちよく「お寺に行ってくるね」と言える自分があるし、自信をもってみんなを誘えるとのこと。この言葉に、たね子さんの人柄が凝縮されていると感じた。



▲桑名別院報恩講 厨房でのお斎作りの様子